

語釈：インターネット Twitter 上でみる Trump 米大統領の英語 (71)

(A Basic Way of Reading Trump-Language)

後 藤 寛

EP 本での意味の問題は 'look' する図絵(pictures)なしにはまるで無意味ともなる感じであるが、本連載では図絵なしで理解 'see' することとなる。図絵といえば前回 A. Korzybski の地図(map) [地図≠現地] に関し触れたが、地図と現地は言語的には主題(Theme)の図(Figure: F)と題述(Rheme)の地(Ground: G)の関係である。本連載での ASMO スクリーンからは図 F が NP₁、地 G が COP/V + NP₂ + NP₃ + A + ADV となる。

まったく便宜的是ではあるが今回、各文例の内容から今日的な emoticon (<emotion + icon) [感情顔記号文字] を末尾に付してもおくこととするが意味には純粋な sense-value (意味価) と、それに付随する feeling-value (情緒価) [本連載(32), (59)参照] があり言語の interpersonal function (対人関係機能) 上のポイントである

今回は(1)で Trump 大統領の 1 期目在任 2 年半の時点での tweet を、(2)で当時の大統領補佐官であった John Bolton 氏の tweet を、そしてさらに前にさかのぼった時点での Trump 大統領のものを(3)で英語・スペイン語対照で see してみる。英文を見た瞬間に pattern recognition により sight translation (ST: 視訳) で次々と素早く日本語へ変換する訓練を積むのもよい。これは英⇄日の通訳法での訓練(training)の 1 つとしてもよく知られている。通訳法といえば今日的には legal linguistics (法言語学)の分野も視野に入れたい。

text 文を連続的に reading としてスラスラ読めなければ listening として聴いても理解 (see)できないわけで、秒単位での超高速黙読 (Super-Rapid Silent Reading: SRSR)の必要性も言った [本連載(68), (69), (70)]。日本の学校機関で英語の扱い方での要領で欠けているものの 1 つが stopwatch を片手にした quick reading だろう。これにより文字言語 / 音声言語としての英語の流れに乗り、ついていけるようになろう。

(1) The Trump Administration has achieved more in the first 2½ years of its existence than perhaps any administration in the history of our Country. We get ZERO media credit for what we have done, and are doing, but the people know, and that's all that is important! 😊 (September 9, 2019)

▲stopwatch で計った超高速黙読での秒数は何秒であったか? 母語話者の呼吸法の感知である。この tweet は本連載(13)冒頭で引き合いに出した 2018 年度の国連総会での彼の演説と似た内容で thematic pattern analysis (主題パターン分析) 上での好資料でもある。この 2 週間ほど後に 2019 年度の国連総会があった。

「大統領在任の 2 年半で米国史上、恐らくどの政権より多くを成し遂げた。メディアはこの政権の功績を何ら評価しないが国民が知っていることだ。それが重要なことだ!」と言っている内容。Trump 大統領のこの English 'without' Pictures を感情的な emoticon で便宜的に印せばここでは意気揚々というところか?

太線の Basic 語 existence (存在) は J. Comenius の「世界図絵」をもじれば「世界語彙」(the Every Man's Words)中の重要語である。語中の[sist]音から「立ち足はだかること」の root sense (原義)を直感したい。他の世界語彙 distance など多くの同系語がある [拙著(2016)「松柏社」、第二部、例(62)参照]。なお、'the Every Man's Words' は筆者の呼称で、Richards & Gibson が *Techniques in Language Control* (1974)で Basic を 'Every Man's English' (EME)とも称したのでそれになぞらえたものである。C. K. Ogden 選定の Basic 語彙は、'the Words of All, by All, and for All'「全人類の、全人類による、全人類のための語彙」でもあるか?

太線語 perhaps も、本連載でたびたび扱った PIE etymon (印欧祖語の語根音素形) の/KAP/から来ている。「獲物の頭を捕らえること」が root sense で Basic 語 keep, have などとも同系であることを確認しておきたい。perhaps には原音の響きが痕跡として感じられもする。獲物の捕獲は確率上の問題でもあった。perhaps の確率は 50%以下と考えてよい [同上拙著、第二部、例(2)参照]。

文中の二重下線部の what と all that は同義となるが、特に what に注目したい。明確でないことは英語ですべて未知数 x の駒 what を布石すればよい。この世は常に what の中身を求めている [同上拙著、第二部、例(56)参照]。本連載(68)で触れたソクラテス風の「問答法」からも what の中身が問題だろう。今日的な生成 AI の thematic analysis of data and meaning (資料・意味の主題分析) からの pattern の発見とも結びつく。

English 'with' Pictures たる EP 本では what は I の p.30 で初出とし、つづく数頁でこれを 30 回以上 (正確には 33 回) 連続的に提示する。他に疑問詞は where? (p.38), which? (p.48), who? (p.58), when? (p.65)の順で導入となる [Basic で what と which は 850 語表には提示されず who からの派生と見なすが、これは所有格 whose が関係代名詞の場合に先行詞は人間でも物質でもよい点とも合わせて考えれば納得はされよう]。

また、how と why は EP 本では I ではなく II へ後回しとしている。**5W's & 1H** での how? と why? を EP 本で後回しとした理由を含め、一連のこのあたりを **grading (G) / semantic sequency (SS)** の観点からどう解釈するか？会として **G / SS** を銘打つ限りこれが説明できなければならない。なお、元来がビジネスマンの Trump 大統領の場合は IH の How? だけではなく特別に How much? (いくら?) を加えた **2H's** となるか？

前回、ドイツ語のように英語も **名詞の語頭の大文字化** で読みやすさがどう変わるか？について触れましたが、上の(1)の文例で名詞の語頭をすべて大文字化し(1)'として示しておこう。対比するとよからう。

(1)' The Trump Administration has achieved More in the first 2½ Years of its Existence than perhaps any Administration in the History of our Country. We get Zero Media Credit for what we have done, and are doing, but the People know, and that's All that is important !

適宜、語を大文字化し意味を強調する Trump 大統領の orthography (正字法) をヒントに、このように英語の名詞語頭を固有名詞のようにすべて大文字化すると(1)より(1)'のほうが読みやすさの度合いが増し上記、英語の呼吸法を会得する 高速読み がしやすくなり 英語力 も増すことにつながるか？

(2) I informed John Bolton last night that his services are no longer needed at the White House. I disagreed strongly with many of his suggestions, as did others in the Administration, and therefore I asked John for his resignation, which was given to me this morning. I thank John very much for his service. I will be naming a new National Security Adviser next week. 😊 (8:58 a.m. September 10, 2019)

▲本連載(16)でも触れたが Trump 大統領は在任中 (1 期目) の 2 年半後に、補佐官で国家安全保障問題担当 [Assistant to the President for National Security Affairs (NSA)] であった John Bolton 氏を対外政策での意見の不一致で突然解任した [文中 2 つの単一下線]。日本とは違い職場での突然解雇はアメリカでは特に珍しいものではない。Trump 氏流に不適切だと判断されれば簡単に “You are fired !” と言われることとなる。

曰く「昨夜 John Bolton にホワイトハウスでの任務はもう必要ないと伝えた。彼の多くの提案には強く反対した。政権での他の者も同じ考えだ。彼に辞表を出すよう指示し、今朝それが提出された。彼の在任中の仕事には深く感謝する。後任は来週決定する」。この時の Trump 大統領の emoticon は上のようなものか？

いかにもアメリカ的な物の言い方であった。強硬派の John Bolton アドバイザーは Trump 大統領には必要な側近で、彼なしでは特に外交政策面で不安はないか？という思いの人は多かったと思う。

実は Bolton 補佐官は自身のツイッター (旧) で「辞表は自分の意思で出し、大統領から辞表提出を依頼されたのではない」という趣旨のことを言ったようであるが、Trump 大統領の tweet (午前 8 時 58 分) と Bolton 氏の tweet (午前 9 時 10 分) のタイミングは絶妙である。上の Trump 大統領の tweet (特に二重下線部) と、次の cf. に示すが Bolton 補佐官の tweet をつき合わせて見てみるとよい。

cf. I offered to resign last night and President Trump said, “Let’s talk about it tomorrow.”
@AmbJohnBolton 😊 (9:10 a.m. September 10, 2019)

曰く「私は昨夜、辞意を申し出たが Trump 大統領は “明日話そう” と言った」。これは Trump 大統領の tweet 発信 9 月 10 日の朝で、12 分後のことであった。Bolton 氏 のこの時の emoticon は上のようなものか？

Bolton 氏も在任中には連日のようにツイッター投稿していたが、退任後はピタリと止まった。彼の tweets を追うのも何かと興味深かった。ただし、氏は実はこの約 2 ヶ月余り後の 11 月 22 日に自身の Twitter を再開した。そして同じアカウント名で「再び戻ってきた。乞う、期待」と次の tweet を書いた。emoticon も違うものとなる。その後も次々と書き込みをつづけたが、右手でメガネを触る彼のしぐさは印象的であった。

cf. Glad to be back on Twitter after more than two months. For the backstory, stay tuned.
@AmbJohnBolton 😊 (November 22, 2019)

上の 2) の文中 2 つの一重下線の言い方に注目しておくといよい。英語的な発想である。

太線語 **disagreed** (<Basic 語 **agreement**) の gree に意味の核がある。PIE etymon は /GRAT/ とされているが「嬉しいこと、満足できること」が root sense で、プラス α Basic 語 **grace** (恵み)、un-Basic 語 **grateful**, **gratitude**, **congratulate**, **gracious** などとはすべて同系 [同上拙著、第二部、例(74)参照]。たとえば I did the work gratis の gratis の意味は？よく用いる言い方で「好意での無報酬で、ただで」の意味である。好意的で悪い意味はない。これを世界語彙の Basic 語ではどう言うか？for nothing とか、free ということになる

太線の Basic 語 **suggestion** などの [dʒést] の音には「身体で運ぶこと」の意味がある。Basic 語 **digestion** (消化)、un-Basic 語 **gesture** (ジェスチャー)、**congestion** (混雑・うつ血・充血)、**exaggerate** (誇張する) などとも同系。文法用語の gerund (動名詞) も動詞に -ing を付して名詞の働きへと運ぶことだと言った [本連載(1)の⑧、また同上拙著、第二部、例(139)参照]。

[以下、スペイン語翻訳版もある tweet (2018.01-05)より — 2言語対照]

(3) Our Steel and Aluminum industries (and many others) have been decimated by decades of unfair trade and bad policy with countries from around the world. We must not let our country, companies and workers be taken advantage of any longer. We want free, fair and SMART TRADE! 🤪 (March 1, 2018)

cf. Nuestros industrias de Acero y Aluminio (y muchas otras) han sido diezmadas a causa de un comercio injusto con países alrededor del mundo. No debemos permitir que se abuse de nuestro país, compañías y trabajadores. Queremos un COMERCIO INTELIGENTE, libre y justo. (2 de marzo, 2018)

▲Trump 大統領の正字法(orthography)に合わせたスペイン語翻訳版も見るが、感嘆符はスペイン語のほうにはない。「わが国の鉄鋼とアルミニウム産業等々は何十年も世界の国々との不公正な貿易と不適切な政策で破壊されてきた。わが国、企業、労働者はもう利用されてはならない。われわれは自由で、フェアで、賢明な商取引を希望する!」と言っている。この時の Trump 大統領の心情を示す emoticon は上のようなものか?

太線語 decimated < decimate は興味深い語で本連載(62)の(2)での dec と同系列の語で decimal (小数・10進法)とも同系。再確認するが PIE etymon の音素形は/DEKM/とされ数の「10」の意味で、decimate は古代ローマ時代には軍が「反乱者をくじ引きで10人に1人ずつを処刑する」の意味にもなった。C.K. Ogden 監修の *The General Basic English Dictionary* (1960) はこれを世界語彙で ‘put to death $\frac{1}{10}$ or very great number of’ と定義しているが、今日的には上の tweet のように「破壊する、壊滅させる」の意味で用いる。なお、dec はこの tweet 文で decimated by につづく decades of (何十年もの) にも見る。ここでは trade (貿易) と policy (政策) は unfair trade and bad policy で共に uncountable (不可算名詞) で用いられている。

文中で下線とした from around the world がサラリと使えるとよいのであるが、空間詞の from と around が重層構造(multiple construction)をなし日本人には意外に難しい思考法となるものの1つである。

もう1つ下線とした ... be taken advantage of any longer の of では間を取り、一息呼吸を整えるとよい。

cf.のスペイン語 diezmadadas (< diezmar = 原義: to make it ten)が英語の decimated に対応する。また、スペイン語の mundo (世界) は英語に mundane (俗世間の・世の) があるが、互いに同系語(paronym)の関係となる。スペイン語は音と文字の関係である phonics (フォニックス) の面からもきわめて規則的で、発話上での呼吸法も楽であり、何かと英語の比ではない。

industrias, muchas, otras, causa, abuse(<abuser), compañías が、それぞれ英語の **industries**, many, **others**, **cause**, abuse, **company** に対応し同系語である(太字体は Basic 語)。なお、二重下線とした se abuse は叙法(mode)がスペイン語に特徴的な心の中の在り方としての叙想法(subjunctive)である。

英語の叙想法も含めた GD 法 / SS (Semantically Sequenced)法実践は日本人にはやはり難点がある。たびたび言ったことで、日本人で G と D をセットで難なく実践できれば Basic 力もさることながら英語力そのものが Richards 並みとなる。英語は EP 本 I の p.30 程度で終わるのではなく、実際にはそれ以降での semantic sequency (SS) が問題だろう。 *A Semantically Sequenced Way of Teaching English: Selected and Uncollected Writings by I. A. Richards* [Katagiri, Y. and Constable, J. (edited, with an introduction)] (1993) で Richards 理論が示されるが、筆者自身は英語を上から眺め下す Basic (BE) [PE: Panoptic English] の理論追究には強い魅力を抱くがこれの EP 本実践には特に関心はない。重要な付帯状況(attendant circumstances)、移動事象(motion event)、位置格(locative case)と具格(instrumental case)の融合した通格(perlative case) [本連載(69)参照] など Richards 自身の実践が如何なるものだったか? などと思うことはある。本会は1980年代半ばの静岡県御殿場(東山荘)での集会の頃が最も会員も多かったが、中身は今日までその当時と変わらないまったく同じ内容が代々受け継がれてきている。実際には GD 法と銘打つ限りその都度の単発的でない流れにそった G/SS の提示と、その根拠の理由付けが課題だろう。D も中身が問題となる。

PE と EP は異質で EP 本の実践は難しい。本連載直近では(69), (70)、また過去の本会 *Year Book* No.71 (2019)での拙論「Básic English と自修本としての ‘English through Pictures’」など参照されたい。ただ、その後ここで提示した EP 本 I・II での語の「提示順早見表」(pp.24-27)にミスがあることに気づいたので今後修正も必要なことはここで断っておきたい[なお、動詞が 16 語ではなく 13 語であった旧 PE と EP 本との名称の混同の回避のため今日的な BE を便宜的には NPE (New Panoptic English) と呼びもできよう]。

Richardsはこの難しい意味論的な段階式 the step-by-step way of teaching English to X の X が the Chinese の場合を試みたことはよく知られる。英語と同系・同族言語(cognate language)の話者であるたとえば the Spanish の場合ならはるかに容易だろう。EP 本は元来が名目上は世界 41 カ国語話者を対象とし編まれた[筆

者の手元にあるが旧版 (Washington Square Press 版) でそれが示されている]。ただ、これは言語哲学のプレ入門書であり、すでに触れたことであるが日常的な対人関係(human interaction)で自然な対話は無理な理屈ともなり事実上、挨拶も満足にはできないわけである [本連載 No.69, No.69-sup.など参照]。EP 本 II 巻末部 p.152 で He says “Good morning” to his mother and father and takes his place at the table. という例文をさりげなく提示はする。そしてこのあたりの問題が意識され (?)、後の EP 本 III, pp.149-153 で示唆的に議論される [関連しては *The Meaning of Meaning*, Sup. I (補遺 I) で B. Malinowski の説く ‘phatic communion’ (社交、儀礼言語使用) pp.315-316、また本連載(52)参照]。ポイントで見逃されてはならない。

本連載(61), (63)で触れたことであるが、仮に対象を英語話者の場合とし日本人による日本語の JP 本 (Japanese through Pictures)なるものを考えるとすると、いかなるものとなるか? また、いわゆる naïve な pictures とは別に何があるか? 筆者が仮に日本語の非母語話者で日本語を学びたいとしたら、やはり生粋の日本人から学びたいと思うだろう。特に音声に関してしかりであるが、日本語を書籍で学習したアメリカ生まれのアメリカ育ちのアメリカ人から日本語・日本語音声を学ぶのは不安に感じるだろう。

さらに関連し、本連載でたびたび触れているが日本人の民族聴覚脳にはフワフワと intonation だけが聞こえ、[l]音と[r]音など明確に区別されたりズムに乗った sound が聴けない。米軍放送の DJ の英語などで日本人に聞こえるのはまるで intonation だけとなる。本物英語のかもしれない出す音はモノラル音的(monophonic)な響きではなく特に米音では鼻音化(nasalized)されステレオ音的(stereophonic)な響きとなるが、物理学的空気圧・周波数、酸素の吸入と二酸化炭素の排気による呼吸法に伴う化学的空気質への注目ということになる [なお、米語がなぜ鼻音化したか?は重要なポイントであり、これに関しては拙論「Basic English と音声：聴覚神経レベルからのアプローチ」日本ベーシック・イングリッシュ協会研究紀要 No.16 (2009)を参照されたい]。

本連載(49), (60)でも触れたフランスの耳鼻咽喉科医 A. Tomatis は、言語音はその言語の母語話者が informant (資料提供者) であり非母語話者はそれとはなり得ないと断言している。専門の耳鼻咽喉科医にして言えることであると思うが実際にはやはりそうであろう。英音もそれが本国生まれや本国の風土の中で育った人のものか否かはネイティブはすぐ判別できる。生粋の日本人があらゆる音響環境で本物の英音を示すことは無理が伴い残念ながら宿命のようなもので、やはり structuralism (構造主義) となる。

以前 NHK の「ニュース英語」に関するラジオ講座で偶然聴いた女性アシスタント役の英語が典型的なアメリカ英語(GA: General American)で、それも西部カリフォルニアの英語(Californian English)の響きであった。口蓋帆と咽頭壁の間の開いた鼻音化英語(nasalized English)でてっきり白人女性(Caucasian woman)だと思いついていた。番組中で日本語も少し用いた。彼女の英語の響きからはとても同一人とは思えない日本語であったので録音テープで何度も聴いてみたが、同一人とは思えなかった。

その後知ったのであるが、彼女は生まれは東京であるが international school で教育を受け、後にやはりカリフォルニア州に住んだ亀井佐代子氏であった。父親が南米チリの出身でスペイン語話者、母親が日本人のようである。とにかく、彼女の写真の顔立ちからも想像できないあの英音とその音色・声質はやはり年間を通じて温暖で快適な米国カリフォルニア州の気候・風土の中から生まれたものと言える。人間の言語音とその国・地域の物理学的な acoustic impedance (音響インピーダンス) の関わりを改めて実感した。比喩的には植物の生育もそれぞれその土地の風土で違うわけである。

なお、acoustic impedance の impedance (インピーダンス・障害) の同系語を Basic 語に求めれば語根 -ped- (足のこと) の[p]音が[f]音となった **foot** がある。「足の中に入れること」が root sense でプラス α Basic 語 path (道)、un-Basic 語 pedal (ペダル)、pedestrian (歩行者)、pace (ペース) などの語が生まれた。

日本人が英音を獲得するための音声モデルとして筆者の観察では発音(enunciation)を執拗に説く日本人の英語には必ず妙なこだわりが感じられ自然でない。英語にはその特徴的な呼吸法がありそのコツ(breathing tactics)がある。その点では本連載(21), (62)で触れたが、学者では早稲田大学の五十嵐新次郎氏は米軍放送 (旧進駐軍放送: FEN) やスポーツ実況放送など、物まね調の英語ではまさにサマになる発音法・呼吸法を披露した。英語の発音が自らでき「モデルを示せた人」であった。また、やはり生粋の日本人で音楽評論家の小林克也氏も米軍放送調・DJ 調の英語に傾倒し物まねで英音を身につけた人で、サマになる英語を披露する。

英語音声に関し触れたので、上の(2)の tweet 文例でたびたび本連載で特別に注目している日本人にとって難点である子音[l]と半母音[r] (米音の場合) の現れる箇所すべてを次に太字体で確認しておく。

(2) I **in**for**m**ed John **B**olton **l**ast night that his **s**er**v**ices **a**re no **l**ong**e**r needed at the White House. I **dis**ag**re**ed **s**tr**o**ng**l**y with many of his suggestions, as did o**th**er**s** in the Admin**is**tr**at**ion, and **th**er**e**for**e** I asked John **f**or his **r**es**ig**nation, which was given to me this **m**or**n**ing. I thank John **v**er**y** much **f**or his **s**er**v**ice. I **w**ill be naming a new National **S**ecur**i**ty Adv**i**s**e**r **n**ext week.

